

日本気象学会昭和41年度

総会議事録

日時 昭和41年5月19日

場所 東京大学理学部講堂

出席通常会員105名、書面参加者および委任状総数550名、以上総計655名。

4月1日現在の通常会員2009名で、上記の出席者数は定款第36条による通常会員数の1/5以上、書面参加および委任状によらない出席会員数は通常会員数の1/25以上の条件を満たしているため総会は成立。

議長は出席会員の互選によるものであるが、司会者に一任されたので、大会委員長正野重方会員を推すことになり、満場一致で決定された。

なお東京大学理学部長（代理）のあいさつがあった。

以下総会の内容は次のとおりである。

(1) 理事長あいさつ（要旨）

（畠山理事長）

春季大会および総会を開くに当ってお世話になった東大理学部長および大会委員長正野会員に厚くお礼申上げる。この機会に過去1年間の学会の活動をふりかえってみよう。昨年の総会には気象学研究長期計画が議題として提出され賛成を得たのであったが、そのうち大気物理研究所の新設については、日本学術会議の昨年秋の総会で政府に勧告することが可決され、12月13日づけで会長から総理あて勧告書が提出された。この研究所のことについては、本日この総会のあとにシンポジウムが用意されているから、そこで意見を述べて頂きたい。

国際電物理会議は昨年5月下旬から6月初めにかけて東京および札幌で開催され、非常な成功のうちに終了。そして秋にはプロシーディングスの追補も出版されて事務を完結した。この会議に色々な形で関係された会員諸君の御協力に感謝する。今後の国際会議としては今年8月22日から東京で太平洋学術会議が開かれる。また9月16、17日には本学会の主催で大気および海洋における拡散に関する東京ミーティングが開かれる。これは京都で開かれる境界層乱流に関するシンポジウムが参加者を制限した会合であるので、それを補う意味も持っているから、その方の専門の方はふるって参加して頂きたい。

ここにもう一つつけ加えておきたいことは、本学会の会員総数が2000名を突破したことである。最近の集計では2009名となっている。このあとで本年度予算の審議もお願いするのであるが、予算書では会員数2010名として計算されている。

昭和41年5月19日

日本気象学会理事長 畠山久尚

(2) 気象学会賞・藤原賞授賞

本年度の気象学会賞を授与するにあたり、畠山理事長から別紙1（218頁参照）の推せん理由の紹介があり、満場拍手のうちに、立平良三会員に賞状・賞牌・副賞が授与された。

つづいて本年度の藤原賞の授与にあたり、別紙2（219頁参照）の推せん理由の紹介があり、満場拍手のうちに、真鍋淑郎会員に賞状・賞牌・副賞が授与された。

(3) 名誉会員の推せん

佐藤順一会員が多年にわたり、気象学の調査研究に精励される一方、気象集誌の編集や学会の事務に従事され、とくに戦中戦後の困難な時代に専心気象学会の維持と発展とに努められた。今日当学会の発展の基礎は、佐藤会員の努力に負う所が大きく、その功績によつて、定款第6条4項の規定を適用して名誉会員に推せんしたい旨の趣旨が、北岡理事より説明された。これを総会にはかった所、満場一致で可決された。なお当日佐藤会員は都合により出席されなかつたので、後日理事長が、名誉会員の推せん状を佐藤会員にお届けすることになった。

(4) 昭和40年度事業経過報告

（北岡理事）

この一年間の学会の歩みをふり返ってみますと、その事業の中で最大のものは国際雲物理会議の開催でありました。

国際雲物理会議は、ご承知のように、40年の5月24日より6月1日まで、東京・札幌において開催いたしました。参加国は17カ国、参加人員350名（中外国人は110名）に及び、非常な盛会裡にこれを遂行することができました。これはひとえに会員の皆さまのご協力による所

が多く、とくに会の運営、募金、開催などに尽力されました方々には、この席をかりてあつくお礼を申し上げます。

さて昭和40年度の総会において、可決していただきました「気象学の長期計画」につきましては、40年秋の学術会議の第44回総会において、他の学会提出の長期計画と総合的に検討され、「科学研究計画第1次5カ年計画について」という勧告として採決されました。今後学術会議では、この勧告の線に沿って、その実現に努めることとなっております。当学会としましては、長期計画委員や当学会の学術会議会員を通じて、学術会議の関係部門と密接に連絡をとりながら、その計画に盛り込まれた事からの実現に積極的に参画し、「気象学の長期計画」の実現に努力してきました。

40年秋に行われました学術会議第7期会員の選挙にあたりましては、当学会は全会員の選挙によりまして、気象学会の推せん候補者2名を定め、会員のご援助を願いました結果、神山会員が当選されました。また当学会員では、化学の分野において三宅会員が当選されました。前に述べました気象学の長期計画の推進など、学術会議との関連が今後ますます多くなることと存じますが、これら学術会議会員を通じて同会議との連らくがはかられております。

春秋の大会はもとより、年2回の講演会の開催、その他例会など、年々盛況をきわめ、気象学の分野における研究がまことに盛大に行われておりますことは、ご同慶のことと存じます。40年度におきましては、以上のほか「気象と海洋との相互作用」「気象と宇宙線」など、境界領域にある分野のシンポジウムも開催され、新たな発展分野が開けるようになってまいりました。中央地方をとわず、気象学の研究調査が盛んになり、日本の気象学のより一層の進展が行われることを祈りたいと思います。

気象学の国際交流としては、国際雲物理会議、さらにはこの秋に行われます Diffusion の Tokyo Meeting などを通じ、ますます広く行われるようになってまいりました。また日本に來訪された方々、たとえばラビツケ博士などとは、その機会をできるだけ利用して、講演をお願いしたり、意見の交換をはかったりしてまいりました。そのほか交流のあまり行われていない東南アジアの諸国、あるいは中華人民共和国、朝鮮民主主義共和国などとの学術の交流にも努力してまいりました。後ほどご審議いただくように、この夏には中国訪問学術代表団が派けん

されますが、気象の分野にも照会がありましたので、できるだけこれに参加するように考えております。

また佐藤会員について、さきほどご審議を願いましたように、氏の多年の努力にいささかむくいる意味におきまして、名誉会員に推せんすることにいたしました。

なお中浅測器株式会社の堀田社長が監綬褒賞を受けられた記念として、当学会に藤原賞の基金として、30万円の寄贈がありました。当学会としては、これを学会賞・藤原賞の基金として運営させていただきたいと思っております。この機会に中浅測器株式会社の厚意に感謝の意を表したいと存じます。

以上40年のおもな事業について、概略を報告いたしました。学会の発展は会員の協力なくしては期しがたいものでありますので、重ねてここに会員のご援助をお願いし、経過報告をいたします。

(5) 昭和40年度会計決算報告ならびに監査報告 (桜庭理事・高橋(浩)監事)

桜庭会計担当理事より別紙3(220頁参照)のように昭和40年度会計決算報告があり、つづいて高橋監事から同決算に対する監査を実施した結果、おおむね良好であるが、財政はとぼしいので近い将来値上げなどの措置を考慮する必要があるのではないかと報告ならびに見解が示された。この見解に対して樋口会員より、天気広告をとるとか、事業を行うとかして、収入を値上げ以外の途に求めて欲しい旨の意見があった。高橋監事は、現在の役員が無報酬で、業務のかたわら学会に奉仕している現状からみて、それ以上のことを役員に望むのは無理ではないかと意見が述べられた。

議長より決算案ならびに監査報告を一括して会員にはかり、異議なく可決された。

(6) 昭和41年度事業経過ならびに予算案 (桜庭理事)

桜庭会計担当理事から、別紙4(221頁参照)の昭和41年度予算案の説明があり、賛成多数で可決された。

(7) その他の報告と議題

(1) 学術会議報告

(神山理事)

神山理事より、学術会議会員選挙に対して、同理事によせられた学会員各位の援助に謝辞が述べられた。また長期計画のその後の経過、ならびに当学会と学術会議との密接化、とくに会員選挙の有資格者の減少について、

当学会会員がより一層学術会議に対する関心を喚起されたい旨の要望が述べられた。

(2) 学術会議有権者登録の要望

(安藤理事)

先般行われた学術会議の会員選挙に際して、気象学会関係の有権者数は、前回に比べてかなり減少していた。一方学会員数は増加して2000名を超えている現状にかんがみると、これは当学会々員の学術会議への関心が低下しているように見受けられる。さきにも報告があったように、今後当学会を学術会議との関連はますます大きなものと考えられるので、会員の学術会議への関心が深まることを要望する。それに関連して、会員が進んで学術会議の有権者の登録を行われるように希望する。研究グループ懇談会その他からもこれについての要望があったので、この機会に会員に願する次第である。

(3) Tokyo Meeting on Diffusion について

(正野理事)

本年9月に京都で開かれる境界層と乱流のシンポジウムに拡散関係の権威者が集まる機会を利用して、9月16、17日の両日気象庁で、上記の Meeting を本学会主催で開催する。会員の中この方面にご関心のある方は、ご参加いただきたい旨、正野理事から要望された。

(4) 中国訪問学術代表国派遣について

(岸保理事)

日中友好協会学術委員のあっせんによって、来る8月中旬より1カ月の予定で訪中学術代表団を送ることになったが、気象学会にも団員の推せん方を依頼されている。気象学会としてもぜひ会員を代表団の一員として派遣したいので、総会の承認をえたい。また会員を派遣するとなれば、国際学術交流委員会でも募金を行うことになるが、これについても合わせて承解をえたい。以上の提案に対しては賛成多数で可決された。

(5) 昭和42年度当番支部について

(安藤理事)

来年度の当番支部は、東北支部がその順にあたり、内諾をえてあるので、総会の承認を願いたい旨の提案があり、満場異議なく可決された。

昭和41年度日本気象学会賞受賞者推せん理由

気象レーダーによる気象現象の解析的研究

立平良三

(東京管区気象台技術部技術課)

レーダーが気象の分野に導入されて以来、多量の新しい情報が提供されるようになった。とりわけ、メソスケ

ールの現象に関しては極めて有力な観測手段となっている。

立平氏は、東京管区気象台および名古屋地方気象台でレーダー観測の現業にたずさわるかたわら、レーダーが持っている性能を十二分に駆使して、寒冷前線・台風、梅雨末期の豪雨、北陸豪雪などが国に大きな影響を及ぼしている気象現象をくわしく解析した。これらの解析は、単なる現象的な解明にとどまらず、物理的機構に対する深い洞察の上に立って、大膽に気象観測データを処理し、注目すべき数々のモデルを作りあげること成功している。

また観測手段としての気象レーダーの利用法ならびにその精度、限界などについても、大きな貢献をしている。

とりわけ、寒冷前線の微細構造に関し、エコーセルの発生源は前線のすぐ寒気側にあり、ここから次々に発生するセルが上層風に流されながら数時間持続するために線状エコーが形成されるという見解を見事に解析的に立証することに成功した。この見解は他の多くの現象に対しても適用することが試みられている。

また、記録すべき災害をもたらした36.6豪雨は、巨大な地雨性降雨帯が持続したために起ったことを示し、メソスケールの循環が維持されるための機構について、乏しい資料をフルに活用して一つの仮説を作り上げた。

このほか一連の独創的な研究により、わが国のレーダー気象学の発展のために寄与した。氏の業績を高く評価して、ここに日本気象学会賞を授与する次第である。

関係論文

寒冷前線のレーダーおよびメソ解析 (1961年10月6日の場合) 気象集誌 41(3), 145~157(深津林と共著)
レーダー降水探知能力の距離による低下について 気象集誌 41(4), 255~260

Structure and mechanism of a Huge Radar Rain-band 気象集誌 42(6), 362~371

北陸豪雪のレーダー解析—各古屋レーダーによる— 天気 12(10), 319~322 (深津林と共著)

台風の降雨帯の解析 (5821号の場合) 研究時報 13(4) 264~279

対流性エコーとこれに伴う積乱雲 研究時報 14(2), 129~232 (桜井幸三と共著)

台風5907号の降雨帯の解析 (5821号との比較) 研究時報 14(9), 621~630

レーダーによるエコー頂高度測定に伴う誤差について